

琉球の染めと織り

南国の自然と人々の思いに育てられた、沖縄の織物。優美な花織は王族や役人の衣裳に、涼しげな織物は夏の衣服として用いられてきました。

芭蕉布

糸芭蕉の木を二年間かけて育て伐採して皮をはぎ、木灰で煮て繊維を紡いで織り上げたのが、沖縄の織物の中で最古といわれる芭蕉布です。



琉球紅型

沖縄を代表とする伝統的な染織技法の一つである紅型。琉球王朝の保護下で紅型三宗家の手により首里を中心に染められていました。独特の色使いは、顔料を用いることにより鮮やかに映える色彩へと仕上がっています。



八重山ミンサー

沖主に帯として利用される織物で、五つの四角と四つの四角と配する縞模様は「いつ(五)の世(四)も仲睦まじく私のことを愛してください」という意味が込められています。

知花花織

模様を縦に連続して浮く経浮花織。たてうきはなおりと、刺繍のように糸が浮く縫取花織。めいとりはなおりの2つの技法が特徴的です。



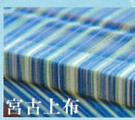
久米島紬

日本の紬の原点とも言われている織物で、たぐさんの植物、百回前後重なる泥土、サルトリイバラと車輪梅、ユウナの炭を粉末にしたものなど大自然に育まれた植物染料で染められています。



宮古上布

島産苧麻の手紡ぎ糸を縦に括って染め経緯に使った、織細で精巧な上布です。織り上げた後で砑打ちをして、蠟のような光沢を出します。



読谷山花織

一度は途絶えた技術が、昭和三十一年代、読谷村民の熱い思いによって復元されました。絹糸や綿糸を用い、福木、車輪梅、琉球藍などの植物を使って染め上げます。



首里織

首里には南方諸国や日本本土との交易により様々な文化が伝えられ、織物技術は中国から花倉織や通電織、絹織、紗織、南方からは緋や花織、ミンサーが伝えられました。日本本土からは紬や木綿などの技術を学びました。



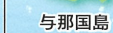
琉球緋

南風原地区で生産されたもので、日本の緋のルーツと言われる織物です。生糸、玉糸、真綿のつむぎ糸、麻糸など、たぐさんの素材を用いて着尺を中心に作り出します。



与那国織

沖縄県の八重山郡与那国町で生産されている、与那国織。日本最西端の島で織られる与那国織は、4枚の布を仕立てて作る平織の民族衣装の総称です。それぞれに個性があり、沖縄の気候風土が反映された美しい織物です。



伝統工芸作家

瀬戸嵐山の世界

日本の自然は『きもの』に生きている。

山河の息吹も、飛ぶ鳥の鳴き声も…

伝統の技は、着る人の肌で活き活きと脈打つ。



瀬戸嵐山 プロフィール

昭和34年 京都に生まれる
昭和53年 京都府立朱雀鳥羽高校卒業
昭和54年 染色工芸作家 打越職王師事
昭和58年 京都プリンスホテル鳳凰の間会場で、朝丘雪路にその場で蝶々の絵を描き、買い求め頂く
昭和62年 打越職王から独立。らんざん工房設立。京都嵐山に在住。
平成3年 美術年鑑掲載 全国各地にて個展開催、現在活躍中。